

短
歌

麻生初枝

梅の花いつきに咲いてまた寒し本当の春は足ぶみしてる
大船の観音さまは山に座し電車の乗り降り今日も見ている
温水の出るキッチンが弱かった母の時代に有りさえしたら…

伊井かずひろ

(心の花)

夜遅い下り電車に眠る子はネズミの耳の帽子をかぶる
江戸の悪を秋山小兵衛が打果たし文庫とじれば風は夕ぐれ
東京のクロスワードのビルの灯が遠去り行くタクシーの中

市川セイ

団子焼の団子挿せよと子が植えし庭木の枝を切りてくれたり
古しえは河川敷なる一等地耕やせし友逝きて荒れたり
幼等が赤き甘藷を掘る上を久しぶりねと赤とんぼ舞う

犬山俊昭

(市民短歌会・慶)

その名だけ軽やかに舞うフリーランス サラリーもフリーの軽みのゆえに
どうもこうもナンデ言わなきやならないのトーキョーニーゼロニーゼロ大会なんて

「スライダーを振らせ『先輩の意地を示した』」ああもう垢じみたこの慣用句

岩井 鉦治郎

(慶「短歌会・市民短歌会」)

敗戦の残せし苦悩を今に負い翁長さん逝きたり澁面の写真

さるすべりの六本の枝それぞれに六羽の雀しばらく平和

あれこれと思いまどわず目の前の先ずすべきこと片づけてゆく

植田 稔

お遍路の作法も知らず一番の札所に立ちて心なみうつ

「こんにちわ」笑顔がふりむき「きおつけて」元氣もらって歩み速める

結願のお礼に参る奥の院満願達して言葉につまる

大澤 清水

梅雨中朝の食卓盛る紅のいちごの匂ひ心そそらる

金色のふくれる稲穂ゆらゆらと一季ひとときの夏の風はや果てし

二方ふたかたに流れる川面渡る月風波寄せて水陰に灯す

太田 博

(市民短歌会・慶)

しんしんと雪降る越後背を丸め雁木がんぎを歩む母のまぼろし

枝垂桜れうらんと咲き夕昏れは早々と園そのの花にきてをり

戦病死せし画学生の遺したる新妻の絵の美しく悲し(信州・無言館)

木村 恵理

車窓に富士山見ゆる初冠雪輝き放つ令和の光

菊祭り着綿かぶせ夜露ぬれ無病願い体拭えば

あかねさす赤とんぼ舞うあざやかに台風去りし青空の下

黒田良子

(市民短歌会)

うたを詠み花を育てて老ゆる日よ氣付けば亡母の足跡のうえ
あまた咲く蓮のうてなに亡き人の面影さがす源平の池
暑い！から涼しい季節を飛び越えて一氣に寒い今年の秋は

小橋和子

「会いたいね」と言い三日後に東京へ十年ぶりの会話がはずむ
喜びをかみしめており娘の笑顔ついに射止めし意中の人を
あら、まあ高野槇の実よ初めて見る赤と緑のきれいな並び

常保惠美子

シャボン玉顔さまさまを虹色に写し子等の喚声ひびく
一先ずは「知っています」と答えたがそろりと辞書を開き確かめる
かりかりと漬物を噛む日々感謝三・月一度は検診高齢

高橋 美津子

夫三十三回忌その顔知らぬ孫等のまなざし声に血すじ見ゆ
身長縮み長襦袢の丈長くなり腰揚げをして調整したり
水栽培ビンの里芋の小さき葉に露の一閃熱帯夜の朝

竹中 亮子

(心の花)

桜色の和紙を表紙の和綴ぢにし書の課題終へ弥生を待てり
空に向かひ轉るひよの嘴はしに似て紫木蓮の花ひらき初めたり
脳内に膨らみてゆく思案ありイルミネーションに溺れて歩く

田中 依子

(なぎさ短歌会)

ひと氣なき露地のしじまに小さき風絵文字のような花びらの舞う
寄り添いて歩む人影そつと抜き松の林を月と帰りぬ
切り口のなんと鮮やかとりどりの具を詰めあわせ春の海苔巻

“助けて”とう心の声を聞きにつつ母の延命「しない」と答う
母逝きて酒と薬に眠る日日あの決断の答え合わせは
幼子の泣く夕暮れはもの悲し亡き母を恋うわれに吹く風

田村孝子

数々の薬を持ちて帰り道ちよつと贅沢なランチが楽し
シワ伸びて若さの秘訣聞かれどもムーンフェイスで苦笑い
タツクルをしても繋がる病玉睡眠薬が美酒に思えて

角田美香

病い癒え露草の青鮮やかに心も新た生まれ変わり
温暖化追い打ちかけて迫り来る悩みの水害共に涙す
夕暮れの空気が震わせ遠花火逸る心は風の間に間に

戸村忠子

中村 勝

突然に電話の向こうのセールスマン海千山千立て板に水
今日とゆう一日は二度とあらなく一日にこだわり一日が過ぎぬ
夜具を干す日差しの中にまどろみてトロトロトロりしばし夢心地

西田 朝子

わが庭の水仙持ちて訪れる日々水遣りをせしこと思ふ
コーヒーの呼びかけありていただきぬ長き廊下も帰りは温し
新しきブラウス早く着てみたたく心はづみぬ歳を取りても

原 けい子

(慶短歌会・花舟短歌会)

蝉の声途絶えて友も逝きたりきやうやく風に秋を知る日か
腹見せてころがる蝉を拾ひ上ぐ重力捨てしもの危ふさ
タイミング逸して切れず老友の愚痴につき合ふ雨の夜なり

広瀬 洋子

(なぎさ短歌会)

晩夏の雨の沈みけり向日葵の花首かしげおり

庭中に緋扇あやめの花盛り令和となるを寿ぐごとし

中継の「即位の礼」をまのあたり新天皇の清しきすがた

堀井 淳一

光る海つなぎ目のない海だけど陸地はけわし国のさかいめ

いくさなき平和というも軍事費の数字のケタを幾度かぞえし

こと多き乾いた世にも雪降り薄いガーゼでいたわるように

森 睦子

遠き日に園児等と遊びし公園に半世紀経て今ひとり立つ

さつくさく雪の小径を歩みゆく子等に銀色の光まぶしき

孫たちと優に触れ合う束の間の幸せの刻胸にたたみて

安井光治

文字追へば魔力に転ずる美しさ九重の薔薇か極楽ひらく
薔薇の棘こころに刺せる痛みあり不浄にしたや詩は毒をもつ
この秋の微塵なるものつかざるを花もしづかに散るときを知る

山本澄子

(市民短歌会)

氷上に一陣の風吹き来り結弦の舞は木の葉となりぬ
後を向き失敗の氣持切り換へてなおみは前を向く間に変わる
妖艶な氷の上のカルメンもマサル抱けば素顔の少女

横溝由利子

(短歌サークル)

老いし猫うしろ足萎え体は軽し「ブラシかけて」と我に擦り寄る
懐かしき昭和歌謡を口ずさみ「やすらぎ荘」に若返りたり
白内障の手術を終えて見る顔にシミ・シワなどの老いが目立てり

◇市民短歌春の大会記録

とき 平成三十一年四月二十一日(日)

ところ 藤沢市民会館第二会議室

参加者 四十名

講演 太田 博氏

(藤沢市民短歌会会長・歌誌「慶」選者・編集長)

演題 「新聞歌壇と投稿歌―日常の

暮しのなかで―」

◎市長賞

ランドセルにどんな未来を詰めてるの？子ら賑

やかに朝の坂道 田中 依子

◎市議会議長賞

この人を置いては逝けぬと送りしも遺されて憂かな
し白き夜ざくら 山本 澄子

◎教育委員会賞

老いづける吾われの憂うれいを見る如く辛夷こふしの一木ひと白しろ牙ろき
えて立つ 山下 健

◎市民短歌会賞

いくさなき平和というも軍事費の数字のケタを
幾度かぞえし 堀井 淳一

◎佳作賞

坂倉玲子・牧キク・早速美知子・黒田良子

◇秋の大会は令和元年十月十三日開催予定でしたが、台風十九号のため中止となりました。